様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年４月３０日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520431
研究課題名（和文）　英語における名詞指向表現の実態分析と英作文教育への貢献

研究課題名（英文）　An Analysis of Noun-Oriented Expressions in English and Its Contributions to the Betterment of Writing Education

研究代表者
福地　肇（FUKUCHI HAJIME）
東北大学・大学院情報科学研究科・教授
研究者番号：90015884

研究成果の概要（和文）：
日本語・英語の対照研究において、従来から漠然と指摘されてきた「英語における名詞指向表現の多用」が実際に、現象としてどのような統語的な姿（名詞句としての内部構造）をとって現れるかを、コーパス分析手法を中心にして、分析した。その結果、名詞指向表現の中核を成すと思われる構造は、いわゆる動詞・形容詞の名詞化形を主要部とする名詞句というよりは、統語上は主要部としてはたらく通常の（派生ではない）名詞が、関係節を従える複合名詞句表現であり、それが、意味上は節（動詞が主要部としてはたらくという意味で、命題的な）内容を伝えるように機能するところに本質的な意義があることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In view of the traditional observation that English is a noun-oriented language, analyses were made of English expressions that are syntactically composed with some nominal as head element in syntactic projections. Through corpus-based investigations, some new findings were made that the typical noun-oriented expressions of English syntax are characterized, not by nominalizations of verbs or adjectives, but by complex noun phrase structures that are made up of true (non-derived) nouns as head and relative clauses that follow them. The latter pattern is said to have a function of conveying propositional contents in noun-oriented syntactic structures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：文学・言語
科研費の分科・細目：英語学
キーワード：英語、日本語、言語学、認知言語学、名詞構造、節構造、メトニミー

１．研究開始当初の背景

「英語は名詞指向の表現を好む言語である」と言った場合、通例多くの人が頭に浮かべるのは、John criticized the book.と節で言える内容を John's criticism of the book のように「名詞化」（nominalization）による表現を用いる、ということであると思われる。しかし本研究が注目する名詞指向表現は、た

とえば次のような関係節構造をした複合名詞句である。(1) The tragedy began with demonstrators who pelted police with rocks and bottles.

この文の統語上のポイントは、前置詞 with が人を表す普通名詞（demonstrators）を主要部とする複合名詞句を従えている点にあるが、意味上は、begin with～（「～をもって始まる」）の用法の趣旨から、with は意味上は「人」ではなく「出来事」を表す名詞句を従えるのが自然である。つまり、例文(1)の伝達意図は(2) The tragedy began WITH [demonstrators pelted police with rocks and bottles]のように、with の意味上の目的語は、単純な内容節（that 節）であり、統語的には、that 節内の項（ここでは demonstrators）が名詞句主要部として繰り上がって、with と統合関係をもち、that 節の残りの部分は関係節として再整理されたものと見ることができる。要するに、(1)は、本来は節を用いて表せる内容を、「主要部＋関係節」という「名詞指向の表現」にしたものと考えてよい。

このような分析の出発点は、P. Schachter（1973, "Focus and Relativization," *Lg.*49）によるイディオム（例えば make headway の headway は指示名詞句になれない）の関係節化に関する研究に始まる。(3) Our advisor was pleased with the headway we had made.（*The headway is great.）また、J. McCawley（1988, *The Syntactic Phenomena of English*）によると、(3)の定表現 the headway を主要部とする名詞句は無色の「進歩」のような意味ではなく、「私達は（大変な、こんな）進歩遂げた」のような情緒的なニュアンスが込められる、と言う。また、この点を J. Hawkins（1980, *The Semantics of Determiners*）は、イディオム以外の表現にも観察している。(4) I recalled the sweet little child Harry used to be.(ハリーがあんなにも可愛い子だったのを…)

更に、いわゆる「潜伏疑問文」（concealed question）や「潜伏感嘆文」（J. Grimshaw, 1979, "Complement Selection and the Lexicon," *Ling. Inq.* 10）と呼ばれる特殊な関係節構文も、意味的には間接疑問・間接感嘆「文」であり、統語的には従属命題の内の 1 つの項名詞が名詞句の主要部としてはたらいている。(5) I don't know the kind of girl she was ten years ago.（どんな女の子だったか…）(6) It's amazing the kind of beer he drinks.（あんなビールを飲むなんて …）

以上要するに、問題とする名詞指向表現の構文としての基本は、「無色の」内容節(2)を基底とする(1)のような表現例にあり、それが(3)～(6)のような言わば拡張された表現形式にも見られるという点が重要である。そして、「従属（命題）節内の 1 つの名詞を選び、そこを主要部として残りの命題構成部分を関係節化する」という点において、(1)のような例が、「名詞を指向する表現」の 1 つの重要なパターンを示していると考えられる。

２．研究の目的

以上が研究開始当初の学問的な背景であるが、これに関連して、福地肇（1995）はすでに、以下の現象を観察している。(1) The council worked for improved schools and hospitals in Shi'te communities.（*Time*）この例の下線部名詞句は、文法構造と意味との対応通りに schools and hospitals that were improved と読むべきではなく、文脈上、…worked to improve schools and hospitals あるいは …worked for the improving of schools and hospitals のように読まないと意

味をなさない。すると、(1)の下線部名詞句は、統語上はたしかに schools and hospitals が主要部であるが、それは意味上節内の１名詞項から名詞句主要部へ繰り上がった結果、全体として「名詞中心」の表現になったものである。

また、次の(2) The President issued a statement that defended *himself*.では、下線部関係節の統語上の主要部は a statement であるが、関係節内の himself に関わる束縛原理の趣旨からは、下線部は意味上 statement を修飾するというより、the President の述部として働いている。つまり、(2)は、the President defended himself by issuing a statement といってもよいところを、statement を主要部とし、defended himself を関係節とする複合名詞句を作ることによって、全体を「名詞中心」の表現にしているのである。さらに、(3) Roses are thorny to protect *them* from gardeners.では、統語上、不定詞主語のコントローラーは主節主語の roses である。しかし、下線部 them の形を見ると、束縛原理の趣旨から、意味上のコントローラは主節の内容全体であり、読みとしてもそれが適切である。するとここでは、主節 Roses are thorny のコントローラとしての働きが、主語の roses に「集約」されて、統語上のコントローラになり、文全体が「名詞中心の」表現になっている。

以上、これまでの「名詞中心の」「名詞指向」の表現を統語的・意味的に特徴づけようとしてきたのであるが、本研究においては、(1)～(3)に加えて、英語が好む名詞指向表現を特徴付ける表現パターンをさらに探し、統語的・意味的に分析可能な形で整理していく。英作文教育への実質的寄与はこの現象の分析と整理をすることから可能になる。たとえば、「溺れる者が藁を摑むように、私は … 」の英訳を、Like a drowning man who will catch at a straw, … のように名詞中心の表現にして、統語構造全体を引き締めるストラテジーを考えることができる。

３．研究の方法

本研究は、平成 20 から平成 22 年の 3 年にわたり、研究代表者の福地肇を中心にして、3 人の研究分担者（淺川照夫、小川芳樹、西田光一）による収集資料および事実分析の結果の提供を受けて、「英語で好まれる名詞指向表現」の実態分析とその言語理論的考察、さらにその結果を（特に日本人による）英語表現技術の向上に資するためのプログラム作成とテキスト編纂に向けた作業を行った。

福地は代表者として、計画全体を統括した。特に、「統語的代喩」を特徴付ける「統語的局地化」のパターンを精密化にする努力を行う。Fukuchi（2006）では、下の例に見られる hopefully が、

(1) Our country will have a hopefully decent relationship with China.

文副詞であり本来は文頭に生じるはずなのに、統語上は名詞句内に入り込んでいるところから、「名詞指向表現の１つの姿として、「研究目的」欄で挙げた４つの局地化パターンに加え得ることを示唆している。本研究計画では、これに類する、あるいは関連しながらもこれとは独立した新事実を発掘することにより、統語的局地化の姿をより精密に記述するように努めた。

浅川は、専門が語彙意味論であり、文の基本的意味関係としての語彙的概念構造と統語構造との対応と非対応、特に動詞に従う不

変化詞や結果補語表現が絡む問題に関心がある。この方面におけるよく知られた分析材料には、たとえば、(2) の their way のように、(2) The children sang <u>their way</u> from the school building.本来名詞が生じるはずのないところに特殊な名詞が現れて、結果的にNP+V+NP という、なじみやすい英語の統語構造を形成している事例がある。この their way が「名詞指向表現」あるいは「統語的局地化」につながるかどうかという問題も、淺川の視点から考察される。

小川の専門は、生成文法理論に基づく日本語・英語の比較対照研究である。この方面での研究は、質・量ともに豊かな蓄積がなされているが、本研究計画においては、統語的局地化プロセスを定式化する上での理論的基盤整備が求められた。たとえば、日本語では、

(3) 学生が　<u>大勢</u>　教室に　来<u>過ぎ</u>た。

のような言い方がよくなされる。ここで、「過ぎ」の部分は、意味上、「大勢」に結びつくべきであるが、統語上は動詞にと結びついて、「意味的なゆがみを伴う」複合述語を作っている。これは「統語的局地化」ではあるが、名詞に局地化しているのではないところに、英語の局地化とは違う性質が見られる。このあたりの日英語比較対照的考察は小川の分担である。

西田は、語用論、文体論、表現論を専門としている。したがって、西田の分担は、名詞指向表現の使用レジスターを明らかにすることであるが、その他に、統語論と意味論が通常扱う範囲を超える表現形式の考察を行った。たとえば、次の(4) He <u>ended the war</u> as a secretarial staff of the General Headquarters. においては、end the war（動詞＋目的語）の連鎖が通常表すはずの他動的意味が、必ずしもあるとは言えず、全体としてはせいぜい「戦争が終わった時には総司令部の秘書課員だった」くらいの読みになる。このような視点から、統語的に生じたNP+V+NP の形が、本研究の統語的局地化のパターンになるかどうかを含め、さらに広い意味的な検討がなされた。

この他、研究協力者として、東北大学大学院情報科学研究科の大学院生（言語情報学、言語テキスト解析論研究室所属）約 10 名に、資料収集・整理の作業の一部を委嘱した。

本研究は、日英語比較対照研究に新たな視点を提供することにあるが、同時に英語教育の向上に貢献することを目的にしている。特に、文法構造を意識しながら英文の解釈と英文の生成能力の向上に、どのように役立つことができるかを、常に念頭において研究作業を続けた。その一環として、日英語の言語構造を常に意識していると思われる、教育学部の英語専攻の学生に対して英語表現力の調査をした。これには該当する組織３校の協力を得ることができ、それぞれ一年間、「名詞指向表現のポイント」を指示したうえで、英作文力がどの程度上昇したかのデータを得ることができた。

４．研究成果

本研究が目指す「英語における名詞指向表現の特徴づけ」は、これまでに挙げた基本的例文に見られる事実を踏まえると、一般的には、(1) … … X_i^j … [$_S$ … … NP_i … …]^j … X_i^j …のような一般構造において、意味上 X と S の間に成り立つべき関係（j - j）が、統語上は X と S 内の NP の間の関係（i - i）として生じる、と分析することである。これは、言わば、意味関係と統語関係の間には単純な対応関係がなく、X の S に対する効果がその中の一部（NP）に「統語的に局地化する」ということである。また、言語表現論の立場からすれば、「一部（名詞）が全体（節）の代わりとしてはたらく」という意味において、

「統語的代喩」（syntactic synecdoche）とでも呼べる言語プロセスが存在することを提唱したことになる。

このような視点から統語関係と意味関係の非対応をとらえようとした研究は、これまでにはないと思われる。さらに、このような視点から「名詞指向表現」を分析した研究はなく、そこから英語表現・英作文教育に活用可能なストラテジーを整理しようとした試みもない。

一般言語学的な見地からは、本研究を進めることによって、統語論と意味論の関係について新たな視座が得られた可能性がある。概略的に、意味的なコンテンツを統語的なフレームに収めるのが言語表現であるとすると、「収め方」に無理が生じた場合、統語構造または意味関係のどちらかにゆがみが生じると考えられる。「意味的な圧力」で統語構造がゆがむことはよくある。He is a fool, I think.の文末挿入節などはその例で、意味的に主節に置かれるべき部分が挿入表現に格下げされているという点で、その形式と文法機能がずれて緩んでいる。逆に、「統語的フレームが強力で、意図した自然な意味関係を無理に押し込めざるを得ない」場合もあり得る。本研究で扱ったのは後者で、(2) The council worked for improved schools and hospitals.のように、統語的な圧力により、どうしても意図した意味関係がゆがんでしまうのである。自然言語におけるこの２つのプロセスは、(3) a. 「意味の圧力と統語的な緩み」と、(3)b. 「統語的圧力と意味上のゆがみ」、と名付けることができる。この両方向への圧力と緩み・ゆがみをある程度許容するのが自然言語の特徴だとすれば、本研究は、自然言語をとらえる新たな見方を提供できたことになる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
1. 福地肇、「『入門ことばの世界』書評」査読無、英語教育 59、2011、95-96
2. 小川芳樹、The dative Alternation as A-Movement Out of a Small Clause CP、査読有、English Linguistics 25.1, 2008、93-126
〔学会発表〕（計２件）
1. 西田光一、 Logophoric First-Person Terms in Japanese and Generalized Conversational Implicatures, Berkeley Linguistic Society, Berkeley, USA, 2011 年 2 月 14 日
2. 淺川照夫、”Out NP” Revisited、日本英文学会、東広島市、2008 年 5 月 28 日
〔図書〕（計２件）
1. 畠山雄二、福地肇、西田光一、他、ベレ出版、「日本語の教科書」2009、352-441
2. 福地肇、東北大学情報科学研究科、「節の配列形態に視点を置く日英語対照分析と英作文教育の質の向上への貢献」2008、総 96 ページ
〔その他〕
ホームページ等
http://.ling.human.is.tohoku.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
福地　肇（FUKUCHI HAJIME）
東北大学・大学院情報科学研究科・教授

研究者番号：90015884

(3)連携研究者
淺川　照夫（ASAKAWA TERUO）
東北大学・高等教育開発推進センター・教授

研究者番号：50101522

小川　芳樹（OGAWA YOSHIKI）
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授

研究者番号：20322977

西田　光一（NISHIDA KOUICHI）
東北大学・大学院・情報科学研究科・准教授

研究者番号：80326454